

本論文集の構成と問題意識——総説に代えて

一 「伝統工藝再考 京のうちそと」 の含む範囲・含まぬ広がり

最初に、「伝統工藝再考 京のうちそと」という題名について、簡単に説明したい。「伝統」「工藝」そして「京都」は、いずれも本論文集の主題を示すと同時に、その枠組みを提示している。だが枠組みは、それが何を排除するか、その外部に何が存在するかを否定的に指し示す。

まず「伝統」とは何かを問うためには、「伝統」とはみなされないものが何なのか、伝統と反伝統とは、いかなる価値観の対立があるのか、そうした対立の背景に何が隠されているのかを見定めねばなるまい。つぎに、「工藝」という言葉が孕む複雑な義は、本《総説》につづく《序論》「工藝の脱構築—「伝統工藝」を再考するに先立ち」で、不十分なが検討を加えたい。「工藝」は「美術ならざ

るもの」としての烙印を押し付けられたが、「工藝ならざるもの」が「美術」と見なされるわけには参らない。両者を隔てる分割線は、けつして平等・対等な包含・排除の関係のうえに成立しているわけではない。ここから「工藝」の鴛鴦な棲息状況が見えてくる。第三に、日本の伝統工藝とくれば、それを「京都」と結びつけるのが、常識的な観念連合だろう。だがそれならば、何が「京都」を「京都ならざるもの」から隔てているのだろうか。「京都」はいかに「京都ならざるもの」すなわち「京都の外」に依存しているだろうか。むしろ「京都ならざるもの」と比較してはじめて、何が「京都」なのかも確定できるはずだ。さらに「京都」内部は、はたして矛盾のない一枚岩なのだろうか。行政と町衆、役所と宗教法人、中京区出身者と右京区出身者とは、あるべき「京都」に抱く許容範囲も著しく違っているはずだ。桂離宮は、一

般には京都を代表する庭だろうが、洛中棲息者からみれば、桂川の彼方、京都の外に転落するだろう。くわえて、人々の意識は地理的現実とは一致しない。「京都」を自称する選択を自らに拒絶した営み（わては京都なんか嫌いや）、あるいは「京都」を看板とすることを忌避された生業（「あなたに京都面してもろたら、かなわん」）から逆照射すること、「京都」がいかなる操作（たとえば行政による認定・排除）と愛憎反する観念の産物なのかも、浮彫にされてくるはずだ。本書の題名は、それが排除するものへの配慮を前提とする。「再考」とは、こうした批判的検討の姿勢を意味するため選んだ言葉である。

二 「過去発掘」「現状分析」「将来展望」 副題の三幅対

次に、本論文集の副題には、「過去発

掘」「現状分析」「将来展望」の三つを並列した。論文集の母胎となった研究会でも、副題には「過去・現在・将来」を謳っていたが、そこには、とかくこの三者がばらばらに論じられがちな傾向への反省が込められていた。歴史家は過去の再構成に熱中し、経営者は商売に忙しく、自らの置かれた状況を把握する余裕に乏しい。そして鳴り物入りのイヴェントで「将来」が語られる機会は多いが、そこでは得てして次回の選挙絡みの人気取りが横行し、行政の施策でも、担当者が次々に入れ替わるために、過去の実績（とりわけ失敗の教訓）を実体験として踏まえた将来構想が経験者によって実行に移される例は、実際にはほとんど存在しない。「過去・現在・将来」といえば、一見ありふれた三幅対だが、この三角形を三竦みではなく、三つ巴の発動機として始動させ、その円運動に魂を込めるのは、くっつけて容易なことではない。

研究会の初顔合わせののち、数回の会合を重ねて、参加者の専門や興味を確かめたところ、最終的に、(1) 歴史的経緯、(2) 現状調査、(3) 伝統的遺産の復

元・伝達の三つの方向性が明確になった。副題の三つの標語も、それに応じて立てた三つのサブ・チームに対応する。それぞれにおいて、調査分野としては、a 陶磁器、b 染織、c 漆、d 金工、e クラフト、および、f 「工藝とその外部」という区分を横軸にとり、分析項目（縦軸）としては、①作り手（職人・家元・企業・後継者）、②社会環境（職業連鎖・問屋、需要と供給、産業構造）、③技術・原料（道具と技、手仕事と器具）、④販売・市場（マーケティング、流通販路、ブランド問題）、⑤行政（振興策の変遷、政治的介入の効果、行政の縦割り、市と府の関係など）⑥批評・言論（工藝批評、広告コピー、提言、流行語など）といった項目を立てた。こうして出来る上る格子のなかで、参加者の得意な分野での受け持ちを定めるとともに、縦横のマトリックス全体を各自が意識しつつ、目配りに努めることとした。

以上をもつて、研究会を進めるうえで、共通の枠組みとしたが、ここに冒頭に説明した「京都」「伝統」「工藝」とそこから排除される対立項が組み入れられ

る。実際に共同研究員各位が調査研究に入るにつれて、各自の関心によって、「京都」「工藝」「伝統」を相対化して評定するための、特化された比較軸がいくつか突出してきた。(イ) 京都に対する金沢や四国、九州といった地域差、(ロ) 日本に対するアジアの近代の検証という課題、(ハ) さらに殖民地と宗主国という枠組み、そして戦後の場合、(ニ) 北米合衆国の陶磁や漆、英国の陶藝、北欧のクラフト、さらには、(ホ) 台湾、中国沿岸部、東南アジアといった新興の生産地への日本国内生産地のスピニング・アウト、(ヘ) ベトナム・ミャンマーの漆あるいは、綿織物の世界的流通のなかでの江南とインド西北部。さらにフィリピンから台湾、琉球へと、黒潮にそって日本列島にまで至る織物の潮流など。

結果として、分野別のX軸（六項目）と分析項目というY軸（六項目）に、地域比較というZ軸（六項目）が加わる三次元の調査地図ができあがった。だが、順列組み合わせ（六の三乗）では、単純計算で二百十六にものぼるこのすべての枠を埋めてゆくことは、五十名程度の研

究者では、物理的にも無理な相談であるし、調査遂行上にも無駄が多すぎる。そこで、こうした机上の論理操作によって一応問題を整理したうえで、実際には顕著な事例が発見される領域に特化して、調査・研究発表を集中することとした。それを本報告書では、通読される読者の便宜も配慮して、とりあえず八つの範疇に分類することとした。以下、その構成と内容を簡単に説明したい。

I 「伝統」の諸相

↳正倉院からユネスコ無形文化遺産まで、

「伝統工藝」とひとくちにいわれるが、この言葉で意識されるものには、大きな個人差がある。木村法光「日本の伝統工藝の源流としての正倉院宝物」では、人類史に類例を見ない宝物の保存と技術調査に長年従事してきた著者の蘊蓄が語られ、伝統保存の意味が、現場から問い直される。つづく、R・ウィルソン「工芸を読み、工芸を書く——近世の京都と乾山焼」は、京都の名品として名高い乾山についての研究で国際的にも著名な論者が、近年欧米で注目されている、美術と文学

との交差という問題意識を、京都の窠跡の発掘という考古学的な発見と結びつけ、伝統の有様を復元する。さらに、玉蟲敏子「琳派の近代と国際性」は、京都といえば琳派という観念連合が、実は十九世紀後半以降の日本と欧米との文化交流のなかで浮上してきた通念であったことを説き、近代に於ける「伝統」の形成・復活のありさまをダイナミックに復元する。こうした美学的伝統の自覚が、ついで一九三〇年代には、国際主義的な伝統主義意識の高まりのなかで発展する。土田真紀「一九三〇年代の工藝と「伝統」——内からと外から」は、ここにもブルノ・タウトやシャルロット・ペリアなど「外部の視線」の「期待の地平」との融合や反発が働いていたことを浮彫にする。最後に佐野真由子「伝統文化の国際的認知をめぐる問題」は、近年発効したユネスコの無形文化遺産の登録をめぐって、いかなる政治的な駆け引きが舞台裏で発生していたかを、企画の現場からリポートし、伝統の国際的擁護に宿る影の部分、伝統擁護による伝統変質の危険、を鋭く抽出する。

II 東西の往還

↳明治期・世紀末の輸出工藝、

自国あるいは自文化の伝統というものを、人々が国家の枠組みで意識し始めたのは、優れて近代の現象といつてよいだろう。それは他者からの眼差しに晒されて初めて自覚しえた、新たな価値観であり、明治の輸出工藝は、意識するとしなにとに限らず、そうした近代の海外での評価との関数のなかに形づくられる宿命を背負っていた。樋田豊郎「明治工藝論——国民国家における職人的「技藝」の役割」は、職人仕事「産業」と「技藝」に分歧しつつ、「美術」と「工業」とに挾撃される状況につき、この分野の第一人者が斬新な見取り図を提案する。横溝廣子「明治政府と伝統芸術」は明治宮殿の千種之間といった、欧米からの来賓を招く洋風の文化装置のなかで、日本風の「伝統的」裝飾意匠がいかに演出のために活用されたかを、残された秘蔵の資料から克明に復元してみせる。そこにも参画した柴田是真は京都に修行し、維新後の東京に活躍した経歴をもつ。その蒔絵、漆絵を詳細に追跡したのが柏木加代子

「柴田是真と京文化」である。欧州の日本趣味のなかで高く評価されたこの蒔絵師の晩年からは、まだ工藝から紙本・絹本の絵画が分離していなかった十九世紀末の京都の価値観が浮かび上がってくる。このように明治期の輸出工藝を追跡すると、今日の美術範疇の階層意識では割り切れない時代の有様が見えてくる。

今井祐子「パリに眠る翻訳手稿… Rakuyakinoo」は、一八七八年のパリ万国博覧会直後から、パリの一部の愛好家が楽焼に関心を示した様子を、『楽焼秘囊』の、忘れられたフランス語訳稿の数奇な運命から説き起こす。さらに畑智子「ボウズ・コレクション」にみる十九世紀輸出工芸の受容の「様相」は、十九世紀後半リヴァプールで日本陶磁器博物館を開設したジェイムズ・ロード・ボウズを取り上げ、なお磁器に高い価値を見出したボウズの評価が、「お雇い外国人」日本滞在者で茶陶マニアのエドワード・シルヴェスター・モースとの論争を招き、やがて歴史の表舞台から抹消されて行く顛末を描き出す。ついで鵜飼敦子「エミール・ガレにおける「工芸」と「美

術」は、農林技師、高島北海との交流も知られるナンシー派のエミール・ガレを取り上げ、その工房でのガラス作品が、装飾美術推奨の政治思想から美術範疇の保守化へと移り変わる世相のなかで、いかに工藝品から美術品へという上昇志向を実現しようとしたかの表裏の綾を分析する。そうした有為転変に日本で対応するのが、最後に取り上げられる明治期の七宝の場合だろう。後藤結美子「知られざる「伝統工芸」——明治期京都の七宝産業の盛衰」は、ひとたび輸出工藝の花形となったはずの七宝が、なぜわずか二十年ほどのあいだに凋落を遂げたのかの秘密に、綿密な考証によって迫り、歴史の力学を暴く秀作である。

Ⅲ モダニズム美学と装飾デザイン

↳ 二十世紀前半の工芸・美術・産業

このように十九世紀後半から世紀末にいたる装飾美術の世界の動向を見ると、美術という自律した造形的価値への信仰とは異質の価値観に操られて、栄枯盛衰の浮沈を辿った産業分野が見えてくる。それは、モダニズムの教条が装飾に罪悪

を見て、純粹造形を謳歌する一九二〇年代の確立とともに、不可視の「昨日の世界」へと追いやられてしまった歴史の真相を見せてくれる。近代京都の工藝を考へる場合にも、西欧のモダニズムや、その影響を直にうけた東京とは異質な価値観がしぶとく居座っていた古都の美意識を勘定に入れる必要があるだろう。稲賀繁美「京都におけるモダニズム美学と装飾・工芸の相克」は、こうした価値観の葛藤に焦点を絞って、京都における絵画や彫刻藝術と工芸の世界との交渉を跡付ける。西洋美術の絵画・彫刻の分類では割り切れない京都の工藝に、古都のモダニズムの濫觴と屈曲の半世紀が探られる。つづく佐藤敬二「近代の琳派としてのデザイン・神坂雪佳」は、琳派の伝統をデザイナーとして近代に蘇らせた図案家の軌跡に焦点を絞り、詳細な一次資料の精査に基づき、伝統に根ざす選択にこそ、京都近代の発露があったことを訴える。さらに、磯部直希「和紙」の近代的生成と工芸の諸相」は、あまり取り上げられることの多くはない和紙産業と民藝創始者、柳宗悦との関わりに照明を当て、

民藝に潜む洋装ハイカラの価値観と、和紙を西洋伝来のイデオロギーで装う柳の半ば無意識の屈曲を、『工藝』にいたる柳の出版業のなかに読み込む異色作だ。ほぼ同世代の日本人画家としてパリで例外的な成功を収めた画家における装飾に迫るのが、林洋子「画家・藤田嗣治——テキスタイルへの情熱」¹³。未開拓の一次資料への接近からは、藤田がエコール・ド・パリに君臨するために、いかに布の装飾の効果を活用したかの謎が解明される。

IV 東アジア工藝の近代

↳ 工藝産業と海外進出の軌跡

柳宗悦や藤田嗣治の活躍した時代は、日本の大陸進出の時期に対応する。そしてこの戦前期・戦中期の東アジアにおける美術や工藝振興には、日本が影に日向に関わっていた。だがこの側面は、近年に至るまで体系的に論じられる機会が少なく、ましてや当時の日本人たちが工藝教育や大陸の民藝に示した関心の持つ意味は、十分には解明されてこなかった。この未開拓の局面に挑む意欲的な論考数

本を得たのは、本論文集のひとつの成果と見なしてよいだろう。

西原大輔「近代日本工芸と植民地」は、その総説に値する網羅性と、釣り合いのとれた目配りで、問題全般を洗い出す。たとえば韓・朝鮮半島では、日本の趣味に呼応するように李朝白磁や高麗青磁が再評価され、今では民族のアイデンティティーの象徴にすらなっている。この経緯に関して、西原は論争含みの犀利な解釈で、従来通説に異を唱える。これを補うのが、朴美貞「植民地朝鮮の工芸と日本」だろう。戦前期から戦中期にかけて日本でいかに朝鮮の工藝評価が変化していったかを跡付ける中で、筆者は朝鮮工藝展の仕掛け人だった田辺孝次に注目し、愛好者たちの市場ネットワークを解き明かす。その中で、例えば六角紫水らの楽浪漆器への関心の背後には、いかなるイデオロギー的な文明観が胚胎されていたのか。後出の関周植などは、漆という媒体の内に典型的な日本の美意識を見ている。それだけに、古代の工藝遺品をめぐる文化表象の政治学とその起源は、さらに追究される余地を示す。

一方、清末中国における工藝行政に関する研究は、今まではほとんど手付かずだったといつてよい。徐蘇斌・青木信夫「清末における勸業博覧会の受容と都市空間の再編過程」はその未知の領域に鉋を下ろした。袁世凱の統治下で、直隸工藝総局には藤井恒久ほか多くの日本人が招聘され、教育に従事していた。その意義は、従来のような理論的全面的否定ではなく、事実調査に基づいた再構成を手がかりとして、再考されるに値する。つづく西楨偉「清末から民国期にかけての中国の工芸美術教育と日本」も、民国初期の工藝教育にあつて、日本からの重視を含む教科書が一定の役割を担っていた事実を、残された出版物を手がかりに復元する。翻訳出版物を通じた中華民国時代のモダニズムの実相には、なお不明な点があまりに多い。同様に多くの課題を突きつけるのが、戦暁梅「鹿間時夫と『満洲』における民藝蒐集」だろう。満洲の人形芝居に深い関心を抱いた鹿間の蒐集や紹介記事は、倉敷民藝館の外村吉之助の中国民藝紀行と並んで、戦前期の「外地」における民藝の可能性を示唆し、

さらなる事実解明を期待させる。そこには単なるオリエンタリズムの日本の複製には還元されない眼差しが秘められていたはずだ。

V 美意識の相克と価値観の葛藤

↳思想運動としての工芸

このように、美術という西欧的な価値観では割り切れない余剰部分を宿した工藝は、必然的に美的価値観における対立の焦点となり、さまざまな思想的葛藤の土俵を提供してきた。関周植「美意識の

衝突——韓国と日本の美術工芸比較論に向けて」は、儒教道徳が重きをなす韓国と、美的価値観が道徳的無節操をまかり通らせる日本との通約不可能性を背景に、相互の美学思想の不毛な対立を解消する美的対話の可能性を探る。また鈴木禎宏「情報技術革命と工芸の将来 民藝運動を手がかりとして」は、後出の中村錦平の問題意識に応答するかたちで、情報化社会といわれる今日における、民藝思想の可能性と限界を問い直す。他方、吉村良夫「工芸を問い直した内田邦夫のクラフト運動」は、京都に開花した内田のク

ラフト運動が、実作において高い評価を獲得し、また高価な美術とはきつぱりと一線を画し、安価で優れたクラフトを提唱する決然たる価値観を標榜したにも拘らず、内田の死後あえなく潰え去る様を描く。そこにはイデオロギーとして鮮烈な光芒を遺しながらも、政治的に無力だった思想の去就に、京都の土地柄まで透視される。はたしてこうした確固たる思想性を、工藝は今後主張する可能性をなお秘めているのだろうか。

VI 経営と流通の国際的変貌

↳アジアの生産現場瞥見

こうした問いに答えるには、視野を日本列島に限定することは許されまい。金谷美和「職人」とは誰か——民族誌のなかのインド職人カースト像の再考」は人類学を専攻する論者が、歴史人類学にフィールドワークの手法を取り入れて、職人という身分がインド社会で負う意味に肉薄した力作である。染織業に従事する職人の社会的地位の分析から、周囲の社会・経済的構造を浮かび上がらせる手法は、翻って日本の問屋機構を分析する

場合にも、大きな示唆を秘めている。それはまた民藝が想定したような中世主義的「名もない職人」といった理想像が、いかに現実から遊離しているかをも解き明かす。つづく、ひろいのおこ「麻の糸績みと手織りの現状」は、「木綿以前」の麻の手織りの現状を技術面から詳細に報告している。また伊藤奈保子「変わりゆく仏壇・仏具業界」は、ここ二十年ほど、日本の仏壇・仏具業界が、その製品供給源を台湾や福建省などの生産地に移している実態を实地検分する。日本の家内工業的な職人生産では、中国の工場経営に太刀打ちすることはもはや困難だろう。

日本人職人による中国企業の技術指導の実態など、業界のスピン・アウトの進展の経年の追跡からは、東アジア仏壇業界再編成の、国際的潮流が見えてくる。

VII 伝統工藝の現在

↳当事者の立場から

もはや機の音など聞こえることも稀になつてしまった西陣では、絹糸の多くはブラジル産ほか外国糸に頼り、裏地などには蘇州の機械織り絹布が大量に用いら

れている。だがその蘇州でも高級絹製品は直営の刺繍工房に限定され、多くの針子は失職し、絹織物の需要は低下し、国内競争力でも「東桑西移」にともない、四川省、陝西省に押され気味、国際競争力でもインドには敵わない状況が進んでいる。そうした構造的な危機のなかで、日本国内の専門職人は後継者を得られず、六十工程にもよる職人仕事の連関のうえになりたつ錦織の技法は、まさに存亡の淵にある。この限界状況にあって、龍村光峯「光峯の織物美術」を中心とする京都の伝統工芸が抱える諸問題について」は、今失われようとしている技法とそれを支えてきた生産機構とに秘められた価値観を、精緻に分析し、そこに近代産業が放置したいまひとつの代替的な世界観を見出す。共同制作により複数のオリジナル作品を生み出す世界は、近代の個人作家主義とは対極をなし、市場経済とは折り合わない受注生産による顧客との親密な関係を担保とする。そこには藝術と自然と科学技術とが未分化だった時代の姿が託されており、この伝統をいかに評価できるかが、ひいては今日の文明

を評定する試金石ともなる。山田実「伝統の将来・伝統、人まず在りき」は、日本伝統織物保存研究会事務局長として龍村を補佐してきた論者がその信念と価値観を正面から吐露した文章であるとともに、行政にも働きかける保存継承事業の実務の姿を如実に語っている点でも、史料・教育的な価値を持つだろう。希少種の絶滅が社会の衰退の徴であるか否かに関する議論は、編者による「終章」と並読していただければ幸いである。

栗本夏樹「漆芸の国際化への取り組み [Utsu Works 2000-2006]」は、二〇〇〇年の在外研修の経験をもとに、英米における漆藝への関心と潜在的な需要とを現場から報告する。この体験が将来の創作にとっていかなる跳躍の礎となるのか、三十年ほど遡る中村錦平の北米体験の衝撃との比較も、ふたりを隔てる時代差、また陶磁と漆との差を実感させて、興味ある話題となるだろう。

その中村錦平「何故に、「東京焼」。」は、「茶碗屋の三代目の倅」としての、金沢の伝統への愛憎半ばする思いを自叙伝として語り、「京焼」ならぬ「東京焼」を標

榜して歩んできた半世紀の時代を見据える。全日本伝統工芸選抜作家展（一九八四）で出品を要請されながら展示を拒否されつつ、結果的に同展を以降中止に追い込むという輝かしい戦歴を持つ中村は、日本人の造形的な弱さ、思想的な脆弱さを、キッチンな毒々しい飾り志向で挽回する。それは町並みを作れない日本社会の醜悪なる風景に官能を感じる作者の、意図的なパロディ、悪意ある模倣的反復にも見える。産業革命から情報革命を闊した現代にあって、産業革命以前の手工藝に執着することに、中村は文明史的な疑義を唱える。この中村の主張に対する、編者としてのとりあえずの応答は、「終章」をご参照いただきたい。

一九九三年、東京、南青山のスパイラルホールに、中村錦平は巨大な高圧磚子の破片を二〇トンも敷き詰めた。このインスタレーション（七〇二頁）が、すでにこの時点で、鉄鋼文明の後の高度情報化社会を支えたセラミック文明の白骨死体墓場を演出し、二十世紀が後世に残すべき遺蹟のあるべき姿を、すさまじい物量作戦によって象っていた。この歴史的

事件は、作者の将来への名誉のために、ここに是非とも明記しておきたい。

Ⅷ 将来への展望

行政施策の推移から二十世紀への提言

以上、伝統の擁護に超近代の証を見る立場から、伝統を愛すればこそその墓地を築いた永遠の前衛まで、研究会に参加した実作者の「伝統」にたいする両極端といつても不足はないだけの振幅が確認された。そのうえで、最後に行政施策に關わる提言へと移るのが順当であろう。

ここではまず、岸本康志「伝産法制定に至るまでの背景と伝統的工芸品の枠組」が、帝展第六部に工藝が仲間入りを許された時代から、伝統的工芸品産業振興法（経済産業省）の施行にいたるまでの行政側の施策の変遷を辿る。さらに柿野欽吾「転換点を迎えた京都の伝統産業政策」が、審議委員の立場にたつて、「伝統産業振興条例」（二〇〇五）の可能性となお残る課題を総括し、西口光博「京都府、京都市における伝統産業振興条例制定について」が、元京都市観光局長の要職にあつた経験に裏打ちされた現場密

着に徹して、「伝産法」施行以来の推移を辿り、きわめて具体的な語り口で、行政の内情に立ち入り、舞台裏の配慮にまで踏み込んだ犀利な観察と読みを提供している。作り手と使い手のコミュニケーションの大切さを確認し、伝統技術と先端技術との融合に目配りする論点、マクローに傾き、きめ細かな施策に不得意な行政の癖、作り上手、売り下手な京都の体質への苦言は、傾聴に値するだろう。

つづく大滝幹夫「市場性を中心に伝統工芸（手仕事等）の展望を探る」は文化庁の調査官としての長年の現場視察の体験から導かれた体系的省察であり、原田平作「京都の美術をさらに力強くするために」は、京都市立美術館での豊かな経験を踏まえての状況鳥瞰、公共施設の沿革・内情に踏み込んで将来への夢を語る。伝統産業振興条例については、中村錦平から、正面きつた違和感の表明もなされているが、こうした自由闊達な意見交換、

時には論争ぶくみの遠慮会釈なき対論が、共同研究会の席では、最後まで、あくまで和氣藹々・闊達な哄笑を交えながら進められた。そのことを付記して、この論

集成立の背景となつた共同研究会の、類稀な雰囲気的一端をお伝えしたい。

本書冒頭には、「京都創造者憲章」（京都ブランド懇話会、座長 芳賀徹による起草、平成十六年九月発表）を掲げた。

清少納言の『枕草子』「春はあけぼの」に始まる章句に託して、明日の理想を語る詩文である。一読されて、はたして読者はいかなる感想を抱かれるだろうか。

その美しい詩想に対するには、いささか不釣合いに艶消しの散文だが、三年半に及んだ研究会最後の、編者なりの省察は、終章「工藝の将来あるいは「ものつくり」再考」にまとめてみた。龍村光峯氏の言及する「文明史的一な問題が、果たしてここに期待を裏切らぬ形で集約されているかどうか。いささか心もとない。だが、その判断は、読者の皆様に委ねたい。

平成十八（二〇〇六）年八月末日

編者・共同研究会主催者

稲賀繁美